

ハロルド・ピンター 『こびとたち』 (1)¹

細 川 眞

1

丁度真夜中になる前に、彼らはフラットへ行った。そこは暗く、ブラインドは降りていた。レンは正面ドアの鍵をあけ、そしてそれを押して開けた。多数の手紙がマットの上に溜まっていた。彼はそれらを拾い上げ、玄関テーブルの上においた。彼らは階段を歩いて下りていった。ピートは居間の窓をあけ、そしてポケットから一箱の紅茶を取り出した。彼は台所へ入って行って、やかんを一杯にした。

レンはメガネをかけ直し、後に続いた。内ポケットから彼はフルートを取り出した。彼はそれに息を吹き込み、電灯にかざして、そして口に当てた。体を曲げて、彼はそれを激しく振り、そしてそれをズボンでこすり磨き、立ち上がり、タオル掛けから堅い布巾をつかんで、そして彼の指を拭いた。彼はそれからフルートを拭き、指の間でそれをくるくる回し、口にそれを当て、穴に指をおき吹いた。音は全く出なかった。

やりすぎるなよ。

レンはフルートを軽く頭でたたいた。

これどうしたんだろう？と彼は言った。

雨が台所の屋根に落ちてきた。ピートはやかんが沸騰するのを待って、ティーポットに湯を注ぎ、それを居間に持ってきた、そしてテーブルにカップを二つ置いた。暖炉のそばに肘掛け椅子が二つ向かい合って置かれている。彼はその一つに座りタバコに火をつけた。

このフルートはどこか変なんだよ、レンは言った。

お茶を少し飲もうぜ。

始末に負えないね。

レンはお茶を注いで、彼のポケットをたたいた。

ミルクはどこ？ 彼は尋ねた。

おまえが持ってくるようになっていたよ。

そうだった。

で、どこにあるんだ？

忘れてきたよ。なぜ思い出させてくれなかったの？

そのカップをくれないか。

さてどうするか？

お茶をくれよ。

ミルクなしでか？

さあ。

ミルクなしで？

ミルクはないだろう。

砂糖はどうした？ レンは尋ねた、カップを手渡して。

おまえが持ってくるようになっていたよ。

言ってくれればよかったのに。

ピートは部屋を見回した。

それはそうと、と彼は言った、すべてが整然としているようだ。

彼は持っていないのかな。

何がだ？

砂糖だよ。

見あたらないぜ。

ここは救貧院のようだな。

暖炉のそばの掛けかぎから、ピートは猿の顔がついたパン焼きフォークを持ち上げて、それをよく見た。

これは面白い。

それか？ レンは言った。前に見なかったか？ ポルトガル製だよ。この家にあるものはすべてポルトガル製なんだ。

それはどうして？

ポルトガルが彼の故郷だからだよ。

そうだ。

あるいは少なくとも母方のおじいさんがそうだ。

ピートはフォークを掛けかぎにそっと戻した。

さてさて。

あるいは彼の父方のおばあさんがそうだ。

玄関の時計が鳴った。二人は聞く。

何時にあいつは帰ってくるんだろう？

一時半ぐらいだよ。

ところで、一息吹いたらどうだ？

息？ レンは言った。

それはどうかしたのか？

どこもおかしくはないんだが。マーケットで一番良かったんだから。しかしこわれたに違いない。前に吹いてから一年だからな。

ピートは立ち上がって、あくびをし、本棚までぶらつく。本は、ぎっしりと積み重ねられていて、埃に覆われている。一番下の棚に彼は聖書を見つけた。彼は書名を見た。

何年前か、おれがあいつにやった本だ、と彼は言った。

何を？

この聖書。

何のため？

ピートはその本を戻して、指を拭いた。

このお茶では、肝臓がいかれるね、とレンが言った。

ところで、それはどうなった？

何がどうしたって？

ちょっと空気をだ。

ぼくはだめだ。

なぜだめなんだ？

雨が降っている。

聞いてみるよ、ピートは言った。

何も聞こえないよ。

雨は止んだぜ。

どうしてわかるの？

おまえには聞こえるか？

いや。

止んだから聞こえないんだよ。

いずれにしろ、とレンは言った、雨はそれと何ら関係がない。

おや、まあ。

いや、ぼくにはわかっている、きみがどこにぼくを連れて行こうとしているかが。

どこへ？

リー川の向こうだろ。

それで？

夜にはそこがどんなかだかはきみは知らない。

おれが知らないって？

いいよ、きみは知っている、知っているかもしれない。しかしきみは再び夜にそこへ出かける用意をしているね。ぼくはしてないが。

いいかね、ピートは言った、おまえはもっと抜け目なくする頃だとおれは思うがね。死の入り口にいるぞ。

彼は腰を下ろした。レンは、ハンカチを取り出して、微笑みながら彼のメガネを拭いた。彼はそれからテーブルにメガネを置き、立ち上がり、二度くしゃみをして頭を振った。

今までこんなにひどい風邪を引いたことがないよ。

彼は鼻をかんだ。

それでも、我慢できないほどではない、実際のところ。

ピートは、座って、炉床を足で踏みならしながら、暖炉の中のすすだらけの新聞を見ている。

さて、レンは言った、バイオリンを取りに行つて、きみが不機嫌な間に二、三さわりを弾いてやろうか？ きみの目がくらむようなアルバン・ベルクの一曲を隠し持っているのだよ。

あいつはおまえに今まで赤い字で手紙を書いてきたことがあるのか？ ピートは尋ねた。

えっ？

赤いインクでだ。本棚にインク瓶がある。

もちろんあるよ。それがどうしたのさ？ きみに赤インクで彼が書いてきたことはあるの？

ないよ。

レンはくしゃみをして鼻をかんだ。雨が再び降り始めて、窓を打ちだした。彼はテーブル越しに体を乗り出し、窓ガラスに鼻を押しつけた。

暗いね。

安息香チンキを吸入しろよ、とピートは言った。

なぜ？ きみは彼に赤字で書いたことはあるのか？

ピートは自分のカップを台所に持って行って、それをゆすいだ。彼が居間に戻ってくると、レンは目を細めて、腕を伸ばして前にメガネを持っているのが見えた。

それはまだそこにある。

今度は何だ？

メガネをつけないことによって何を見逃しているか、きみは知ってない。

おれが何を見落としているかだって？ 自分のカップにお茶を注ぎながら、ピートは尋ねた。

いいかい、いい、レンズの中心には常に光の点がある、きみの視野の真ん中に。間違つて歩くことはない。足を踏み外すこともない。いつも真っ暗な夜ですらちょっとの光の断片があるよ、きみの前に保たれてね。いいかい、ぼくと同様きみも知っているんだが、額に絶えずしわを寄せて動き回っている人々がいる。時々、彼らはなんとかそのしわを取り除こうとする時、正しいんだが、彼らは何にでも金を使う。えっと、ところで、ぼくが同じ見解を持っていると言っているんじゃないよ、この光の一点が存在しているとぼくが理解している時があるからといって。見解の似ているところはどこもないんだ。しかし、ぼくが言おうとしているのはこれだけだ。この光の一点が何をしようとも、それは、きみの眼窩の角度を示しているよ。そのようにぼくを見る必要はないよ。きみはわかっていない。それは、きみに方向感覚を与えるんだ、たとえきみが決して一つの地点から動かなくともね。

ひざを曲げておれは進まなければいけないのかね？

最新の秘密情報をあげよう。

一つの質問にだけ答えてくれ、とピートは言った。おまえ自身は額に絶えずしわを寄せて動き回ることはないんだな？

まさにその通り。そういうわけで、ぼくは自分が何について話しているのかわかっているよ。

玄関の時計が一時を打った。レンは彼のメガネをそっとはめて、じっと座った。

十中八九、彼は腹をへらしているだろうな。

なぜだ？

賭けてもいいよ。

ピートは目を閉じて、仰向けに横たわった。

あの男は牛のように食うからね、とレンは言った。

彼はフルートを手の中で回した。

以前ぼくがジャケットを脱いでる間に、彼はパンひとやまを食べ終えるのを見たことがあるよ。

彼は、フルートを左の目におき、その中をのぞき込んだ。

彼は昔は皿にパンくずひとかけらも残したことがなかった。

ピートは目を開け、マッチをすり、それが燃えるのを見た。

もちろん彼は変わったかもしれない、とレンは立ち上がり、部屋の中を動きながら言った。物事は変化する。しかしぼくは変わらない。きみは知ってるかい、ぼくが先週のある日、五回もの質、量とも充実した食事をしたのを？ 十一時、二時、六時、十時、一時に。よくやったよ。仕事をすれば腹が減る。その日ぼくは働きづめだったのさ。

彼は戸棚に寄りかかって、欠伸をした。

ぼくはいつも起きたときは腹ぺこさ。昼間はぼくにおかしな作用をもたらすよ。夜については、それは言うまでもない。ぼくに関して言うと、夜にできることといえば、食べることだけだ。そのおかげでぼくの体の調子がいい、特にもし家におればね。やかんをかけるため階段を走り降りる、やりかけていることを終えるため走って登る、サンドイッチを切ったりサラダを並べるために、また走り降りる、やっている仕事を終えるため走って登り、もしソーセージを食べようとするなら、その準備に走って戻り、やりかけた仕事を終えるため走って登り、テーブルの準備のため走り降り、仕事を終えるため走って登り、駆け戻り、、、

わかったよ！

きみはどこでその靴を手に入れたの？

えっ？

その靴だよ。いつから履いているの？

何だって、この靴がどうしたんだよ？

わからなくなってきたんだ。一晩中きみがその靴を履いていたのか？
いいや、とピートは言った。ベスナル・グリーンからは裸足で歩いてきたよ。
頭が混乱しているにちがいない。

彼はテーブルに座って、頭を振った。

おまえは最後にいつ寝たんだ？ ピートは尋ねた。

寝た？ 笑わせるなよ。ぼくのすることと言えば寝ることだけだよ。

仕事はどうなんだ？ 仕事はどうだい？

ユーストン？ かまどだよ。あれはかまどだよ。それでも、悪い空気はよくないが、
空気がないよりはましだろうよ。夜間勤務は最高だね。列車は入ってくる、仲間に
半ドルやるとぼくの仕事をやってくれる。ぼくは丸くなって座り、時刻表を読む。
食堂はいつも開いている。もしぼくが今晚そこにいれば、欲しいだけのミルクと砂
糖をいれた一杯のお茶がもらえるんだ、本当さ。

ピートは立ち上がって、体を伸ばし、壁に手を押しつけた。

もう少し体重があれば有り難いだろうに、とレンは言った。きみは骨だらけだ。

あいつはすぐにここに来るな。

最近自分の頬骨を見てみた？ 頬から突き出ているよ。

それがどうしたんだ？ ピートは言った、窓の外をじっと見ながら。

レンはメガネを外して、目をこすった。

ぼくは変化し続けていると思うんだ、と彼は言った。

おまえがか？

そう感じる。変化をしていると感じるんだ。

ピートはティーポットとカップを集めて、台所へ持って行った、そしてそこでガス台
にやかんをかけた。

どうなるんだろう、レンは戸口で尋ねた。

あいつは飲み物をほしがるだろうな。

ミルクなしのお茶をか？ きみはわかっていないね。砂糖もミルクもないお茶で自
分の家に帰ってくる人間を迎えるなんてできないよ。

考えをまとめろよ、ピートは言った。手紙でおまえに何を書いてきたか言ってみろ。

アパートへ行って、やかんをかけておけ、と彼は言ってきた。

お茶のためか？

お茶のだよ。

それこそおれが今やっていることじゃないか、ピートは言った。実際、おれはその
厳密な意味であいつの言葉を解釈しているんだぜ。あいつはお茶を飲むつもりだ。

ブラック・ティーを。何も入れないお茶。一クォーターで一ポンド、九ペンスの。
ベルが鳴った。

あいつだな、とピートは言った。ドアを開けてやれよ。

2

よく寝むれたか？

一日中寝てたよ、とマークが言った。

中に入れよ。

レンはドアを閉めた。彼らは階段を降りて、台所に入っていった。

おれの台所どう思う？ 変わったか？

マークはポケットから櫛を取り出して、髪をといた。

最高級クラスになりうる台所だけ、と彼は言った

ねえ、マーク、とレンが言った、きみがよく眠れて嬉しいよ。あのね、この本どう思う？ きみにちょっとこれを嗅いでほしいんだ。そのようなものを見たことがないと思うよ。保証するよ。

マークはポケットに櫛を戻し、本のタイトルを見た。

『ライマンの積分理論』。どうしようというんだ、おれを誘惑に導いて？

読んでみたらどう、レンは言った。それはきみの趣味にあってるだろ。

二週間後の次の火曜日なら、マークは言った。おまえはおれにそれを始めさせられるよ。

きみは一生のうちのせっかくの機会を逃しているよ。

数学、チェスとバレー。十一、二才で始めないとね。

きみは何について話しているのかわかっていない。

むしろその前だよ。

いいかい、レンは言った。昨夜はずっと、機械学と行列式を勉強していたのさ。

元気を出すのに、微積分学をちょっと見るほどいいものは何もないよ。わかるかい？

それは死んでいる。人を食べることがない。心は門を飛び越え、空中を歩む。

なんだって？

本当なんだが、いいかい。自分が五分五分の賭けのような何かだと感じるのは、その時だけなんだ。

これは何だい？とマークは言った、ページの間から一枚の紙を取り上げて。

何？

おまえの詩の一つだけ。

レンはそれを引ったくって、急いで読み、そしてみくしゃにしてポケットに押し込んだ。

どうしたんだ、マークは言った。見せろよ。

ちんぷんかんぷんなやつだよ、レンは言った。何にもないよ。癩病のようだ。

彼はそれをポケットから取り出して、流しの下ゴミ箱に突っ込んだ。

それは問題外だよ。

そうだろうな。

レンは顔をしかめ、苛立ち、そしてシャツの袖のボタンをかけた。

ピートはどうしたんだ？とマークは言った。やつは最近何か書いていたか？

ぼくは知らない。知るわけがない。ぼくにはかかわりのないことだから。しかし彼は最近他の面倒なのをかかえているよ。そのことは知っている。

そうなのか？

そうだよ。

驚くよ、そうだとは。

きみが驚くのも当然だ。

マークは微笑んだ、そして何も無い台所で周りを見渡した。天井は低かった。食器戸棚、椅子そしてテーブルは、簡素で、色の薄い木製だった。壁の側面には給湯器が突き出していた。ここは真四角な部屋だった。小さな窓が庭の方に向いていた。

おれたちが住んでいる、彼は言った、部屋は。

言わないで、触れないで、とレンは言った。

手まねで示して、彼の手首はぐいと動いた。彼は頭を振って、歯をカチカチした。

ぼくたちが住んでいる部屋は、出入り自由でそして閉まっている。

テーブルの下から、彼は椅子をきしらせて座り始め、椅子の背を押して動かし、壁をゴツンとたたいた。

これらの部屋は意のままに形を変えるね、と彼は言った。ぼくは喧嘩をするつもりはないよ、不平も言わないよ、いい、もしそれらが同じままで不変なら。しかしそうではないんだ。そしてぼくには、当然であると信じ込まされている境界、限界が見えない。それが厄介なのだ。ぼくは部屋、ドア、階段、全ての自然の性質に全く異存はないよ。しかし、ぼくはそれらを当てにできない。例えば、夜、列車の窓から見て、そして非常にはっきりと黄色の多数の明かりを見るとき、ぼくはそれらの実態がわかる、そして静止しているのがわかる。しかし、それらはぼくが動いているからこそ、ただ静止しているだけだね。ぼくは、ぼくとともにそれらも動いているのを知っている。そして、カーブを曲がる時、それらはぶつかって消える。しかし、それらは静止している、ただ同じだということをぼくは知っている。結局、地面に根ざしているポールにくっついているだけだよ。だから、大地自体が静止している限り、もちろんそうではないんだし、それは又別問題なのだが、いずれにしろ、それらは、それ自身の素質で、相対的にじっとしているに違いない。要点は、木の実の殻の中で、ぼくが動いているときそのような事実を、ぼくはただ認識できるということだ。ぼくが静止しているとき、周りのものは何も自然の行動をとらない。なにもぼく自身が基準だと言っているわけではないよ。そう言うつもりはない。結局、ぼくがその列車に乗っているとき、実際ぼくは全く動いていないんだ。それは明らかだね。ぼくは角の座席に座っている。ぼくはじっとしている。ぼくは、多分、動かされ続けているが、動かない。黄色の明かりもそうしない。仮に列車が動いているとしても、しかし、列車はそれと何の関係があるのだい？

まったく、とマークが言った。

それできみの立場は？ ぼくは、これが、開いててかつ閉じられた実例ではないと認めるのに全くやぶさかではない。しかし、即座にぼくは、開いてて閉じられたどんな例も思いつかないよ。ごく率直に言って、一つの例も思いつくことすらできない。正直に言うと、証拠の少しもない。それは法廷で見込みがないだろう。判事はものすごく怒るだろう。そしてぼくは免許を取りあげられるだろう。

疑いないね。

それは冗談ではない。

まったく。

陪審員は動くだろうか？

えっ？

いや。彼らは席でじっとしているだろうね。そしてぼくは被告席にいるままだ。何ら変化なく。この件で、もっともぼくが動けば、彼らもそうする。ぼくが監房に投獄されれば、彼らはタクシーを呼ぶね。

その通りだ。

変化するが、まったく変化なしだな。しかし、すべてこれによって、どこでぼくの問題が解決されるのか？ きみはぼくにそのことを教えてくれるか？ いや、もちろん、きみにはできないね。そういうことなのさ、それがすべてさ。そしてずっとそうだろうね。多分ぼくたちに罪はない。あるか？ ピートなら罪があるというだろうな。きみなら言わないだろう。ねっ？

確かに、とマークは言った。俺たちにはないよ。

レンは笑った。彼は地階のドアを開け、息を吸った。雨が降っていた。

ところで、マークが言った、言っておかなければいけないことが一つだけあるぞ。

それは何だい？

おまえが中にいる時には、おまえは中にいるってことさ。

うむ？ レンが言った。今何て言った？ おまえが中にいる時には、中にいる？

その通り。

きみは正しいね。ぼくは否定できないよ。きみはそれ以上の本当の言葉を今まで一度も言ったことがなかったね。おまえが中にいる時には、彼はテーブルの周りを歩きながら繰り返した、中にいる。その通りだ。びっくり仰天させられるね。忘れないようにしないとね。どうしてそのようなことを言ったんだ？

ただ頭に浮かんだだけだよ。おまえが中にいる時には、中にいる。

そうだね、とレンは言った、ぼくはそのことを認めなければいけないだろうな。きみはそれから逸脱することはできないよ。それは理にかなっているからな。きみが中にいない時には、きみは外にいる。いや、もっと正確に言えば、きみが外にいる時には、きみは中にいないってことさ。

そうだ、その方がもっとふさわしいね。

きみが中にいるときには、レンが呟いた、きみは中にいる、だね、それじゃ、ぼく

は厳しい冬に備えてそれを取っておくことにするよ。

階上の居間で、マークはすり切れた皮の肘掛け椅子で反り返って、天井の光の円を見つめていた、一方レンは注意深くバイオリンをケースから持ち上げ、弓を調整しながら、バッハの一節に集中し、しかめっ面をし、頭の中で描いた音符に飛びついていた。

ぼくはこれができない、と彼は言い放った。

ドアの裏でゴツンと音がした。彼はドアの取っ手を回した。ネコが体をよじって通り過ぎ、テーブルの下で這いずり回った。

これは途方もないやつだ。練習しないとね。ぼくの指は絞り器ぐらいの感度しかないよ。窓を拭いてた方がましだ。

おれには申し分なく鳴り響いていたぜ、とマークが言った。

だめだ、だめだ。それではバッハに侮辱だよ。無礼だよ。問題は、バイオリンをケースに入れながら彼は呟いた、ぼくが自分のエネルギーの向かう方向を見つけたとき、それを維持できないということなんだ。ぼくはすべきなんだ。ぼくは自分の音楽の練習以外に何もしてはいけないのさ。仕事の打ち合わせに行き、それに執着する。しかしこれを見てくれよ。ぼくは農夫、建築業の相棒、荷造り業者、舞台係、船荷発送係だった、芝土を掘り返したことがある、ホップ摘み、セールスマン、郵便配達人だったこともある、ぼくは今駅の赤帽、数学者、バイオリン弾き、ぼくは物書きで、クリケットの物笑いの種を演じている。ぼくは真珠採りに関わったことがないし、看護師だったこともない。それはどんな種類の体格の人だ？ 冷笑に値するよ。ぼくは鏡の中をのぞき込んで、これはぼくだと一度も言うことができなかつたよ。そのネコは何をしようかとくらんでいるのだろうか？

ネコは、ドアを発作的に急激に揺すぶっている。

どうしたんだい？ レンは言った。いいよ。出ていきな。ぼくにはまったくよく理解できるよ。

マークは、そのしっぽが夜の中へびくびく動いていくのを見ながら言った、ネコには目にする以上のものがないのかはっきりしないよ。

レンはドアを閉めた。

下へ降りていこう、と彼は静かに言った。

上がってきたばかりだぜ。

わかってるよ、下に行こうよ。

下に行くか、マークは言った。

彼らは木の階段を降りて半地階に入っていった。レンは台所の明かりをつけた。マークは座って、欠伸をし、タバコに火をつけた。

ああ、ええと。

ねえきみ、レンは言った、きみはぼくが話している言葉を理解しているのかがまったくはっきりしないのだけど。

何を？

もちろん、きみはわかっているのかもしれないし、あるいは、きみが口を開くときに、適切であるかもしれないしあるいはそうでないかもしれないような、まったくの当て推量をきみはしているのかもしれないが。もしその通りなら、きみはかなりの有望な射手だ、そこまでは一応認めよ。しかし、ぼくは時々、きみはフォルムの勉強以外には何もしていないという印象を持っているよ。例えば、ピートは、ぼくが言っていることがわからないときは、いつも何らかの方法でぼくに知らせてくるよ。彼はそれが道徳的義務と感じているんだ。きみがそうするのはごく希だよ。それはどういうことなんだい？ それは、きみが決して関わりたくないということなのか？あるいは、それはきみには関わることが何もないということなのか？

マークは石の床に灰を落とした。それは形を壊さないで落ちた。靴の先で彼はそれをそっとけ散らし、テーブルの脚の側でそれをすり潰した。彼はレンを見上げた。

何か大事なことを言っていたのか？

どこで芝居をしていたの？ ハダースフィールド？

そうだよ。

ハダースフィールドではきみは人気あるの？

気に入られていたよ。

演じるってどんな感じなの？ きみを喜ばせるのか？ 他の誰かを喜ばせるのか？

演じることがどうしたのか？

それは由緒ある職業だね。それは伝統がある。言うまでもないが。しかしそれは何をする？ きみが舞台に歩いて行って、全ての人が見上げて、きみをじっと見る時、きみは喜びを感じるのか？ 多分彼らはきみを全然見たくない。多分彼らむしろ他の誰かを見たい。今までに彼らに尋ねたことがあるかい？

マークは笑ってタバコに火をつけた。レンは歯をきしらせてテーブルに座り、額をたいた。

きみはぼくが何だか知っているかい？ ぼくは外国の権力の手先だよ。

ドアのベルが鳴った。

石炭投入口の格子を通して、ピートは、中の半地階の部屋から地下貯蔵庫に光りが差すのを見た。彼はドアの側面に寄りかかった。軽い風が低い生け垣を駆け抜けた。月が、移ろう雲の間で明滅した。一匹の屈強そうな黒ネコが階段を跳び上がり、彼の靴を踏みつけ、そしてドアのところで目を閉じて座った。その尾は彼のくるぶしを軽くぴしっと打った。彼はその弓なりに曲げた姿を見下ろした。ネコはその鼻をわずかな隙間に押しつけた。彼らは黙って待っていた。レンがドアを開けた。ネコは彼の脚のあいだで頭を下げて玄関に入ってきた。

それは何だ？

ネコだよ。

おまえのネコか？

おれのネコ？ ピートは言った。おまえは何のことを話しているんだよ？ おれにはネコはいないじゃないか。

いなかったかい？

それじゃ、さあ、入れてくれよ。

ぼくのネコにちがいないと思うが、とレンは咳き、後ろのドアを閉めた。

おまえのネコであるだけのこと。

なぜだ？ どうしてそのようなことが言える？

ちょっとおれたちおしゃべりをしたんだ、ピートは言った、戸口の上がり段で。

何について？

数の理論について。

あいつは何と言った？

少し休ませろよ、とピートは言った。耐えられないぜ。なぜあかりを少しつけないのだ？ ここは、カルカッタの小さな地下牢みたいだ。

マークは足をテーブルにかけて座っていた。

ほう何だって、ピートは言った。

やあ。

ぼくはあのネコを信用しないよ、とレンは言った。裏のドアの外に出したんだ、そしたら表にやって来る。

大気の中で一度体を振ったらどうだ？ 外にはシラミを振り払ういい風があるぞ。飛び入り自由だぜ。おまえたち二人ともそれをやっても悪くはないような顔をしているぜ。

マークは床に足をぶらぶらした。

おまえの言うことは正しいよ。外に行こう。

多分きみたちは出かける前に、ちょっとセレナーデを聞きたいだろう、とレンは言った。それはスパックとラッツので、イエッタ・クラッタによる演奏だよ。教会音楽だよ。

また別の機会に、ヴァインブラット、とピートは言った。

彼らは家を出て、アヒルの池まで歩いた。木製の橋の側のベンチで、彼らは新聞を開き、座った。風が木の葉から垂れる雨をかしげた。

ピート、ちょっと聞いて、とレンが言った。何故きみはぼくをいつもヴァインブラットと呼ぶんだ？ ぼくの名前は、ヴァインシュタインだよ。いつもそうだった。

その名が心から離れないんだよ。

マークは咳込み始めて、その咳はゴロゴロ鳴る耳障りなきしむような音になる。あえぐ間にののしりながら、彼はよろめいて池の端まで行き、そして唾をたくさん吐く。のどをすっきりさせて、彼は再び暗い水の中に唾を吐く。

マーク、とピートは言った、唾を吐いてばかりだからとてつもなく体調が悪いぜ。

どうも、マークは言った、藪の中に唾を吐きながら。
彼は座って、口を拭いた。

しかしおれが知りたいのは、とピートは言った、おまえはいつのどをごろごろいわせるのをやめ、修道士の外套を着るつもりなんだ？

おれがか？ どういう意味だい？ おれは牧師だよ。どこにおいてでも、ベッドでおれはもっとも敬虔なんだよ。おれはやつらすべてを天に舞い上がらせているぜ。

おまえが言おうとしていることは、やつらすべてを楽園に案内することか。
まさにその通り。

レンは立ち上がって、手をポケットに突っ込み、池の側に佇んだ。

ぼくはあることにサインしたんだ、彼は言った。

軍隊に入隊したのか？ マークは尋ねた。

いや、とレンは腰を下ろして言った。ぼくは保険会社の仕事に応募したんだよ。
まさか。

どういうことだい？ ピートは言った。あいつがそれに我慢できるかどうか見てみる。

どうなるかわかっているよ、レンは言った、会社は一日中ぼくに死亡表をまとめさせようとする。ぼくは座って、次善の死亡割合を計算する。マーク、きみのような奴は、ただ次善死亡割合を得るだけなんだよ、最善ではなく。

おれのようなやつがどうしたのだ？ ピートは言った。

きみが最善のを得るはずがない。最善を得るやつなんてくそくらえだ。

おまえのネコはどうした？とマークが尋ねた。

おまえなら最後までやりぬけるよ、ピートは言った、元気がガッツで。

ピートとマークはタバコに火をつけた。レンは二人の手がマッチの方に傾くのを見た。

冗談じゃないぜ、この業界、マークは言った、煙を鼻から滑るように流しながら。

そうだね、レンは言った、きみたちのその見方次第なんだよ。例えば、いつも木を触っていた変人を知っているよ。それでやつが何をすることになったわかる？ そいつは図書館で仕事を得たんだ。図書館で木に触ることがあるあらゆる機会を見て

みるよ。そこは木で一杯だよ。彼は人生のチャンスを得た

レンは立ち上がった。

いいかい、ピート、と彼は言った。きみの手を見てごらん。

おれの手かい？

そうだよ。

彼はピートの左手を自分のあごまで持ち上げて、メガネを下げそして手の平をじっと見た。歯の間で息をし、もっとくっついて体を曲げた。はっとして、彼は手を投げ出した。

きみは殺人狂だ！と彼は叫んだ。そんなことだろうと思ってたよ。

何だって！とマックは言った。

その手を見せてよ、レンは求めた。お願いだ、その手を見てよ。よく見て。直線が真ん中をまっすぐに横切っている。まっすぐに中央を横切っているんだよ。水平に。彼が持っているのはそれだけさ。他に何がある？ ぼくはそのようなものは何も見たことがないよ。きみは変人だ。

大いにありうるぜ、ピートは言った。

大いにありうるだって？ そのような手をしたものは百万人のなかで二人もいやしないよ。一目瞭然だ。きみは殺人狂だよ。ほんのちょっとの疑いもない。最後の賭けをしていい。

レンは夜間勤務だった。彼はバスに乗るため彼らと別れた。ピートとマークはベスナル・グリーンの方に歩き始めた。

あいつは何をしようとしているか知っているか？ ピートは言った。

いや。何だい？

新約聖書を読み始めたんだ。

そしてご幸運を、か。

おれは先日、おまえにやった聖書に出くわしたよ。

どこで？

おまえの本棚でだ。

ああ、そうかい。

もう読んだのか？

ええっと、実を言うと、ピート、おれはまだそれに完全には手をつけてないんだよ。もう五年だぜ。何のためにおれはおまえと付き合っているんだよ。

いや、おれは、それを始める前に、先ず休暇が必要だったんだ。

もう、おまえは関心の範囲を広げる頃だぜ、とピートは言った。自身のために頑張れよ。

どうなることやら。

彼らは電力会社のそばの角を曲がった。

愛についておまえは何を知ってる？ ピートは尋ねた。

愛か？

そうだ、おまえなら何か知ってるだろう。

どうしておまえがそんなことを言えるんだい？

突然驟雨がきて、二人は本屋の入り口に駆け込んだ。彼らは雨が警察署の石段で跳ねているのを見た。警官が一人署から出てきて、道路の向こうを見た。

ところで、マークは言った、ここはロンドン東部で一番いい古書店だぜ、クライヴは。

強い印象を与えそうだと言えるな。

あれは『イエロー・ブック』でないか、黒の本のちょうど後ろの？

それはチョウセンアザミと何か関係しているぜ、ピートは顔を下に向けて言った。

警官が彼らの方に道路を歩いて来た。

エチオピアの建築と思ったが、それは、

どれが？

危うく買いそうだったあの本。

おおあの本。おれは、それはブリッツの『論理学と結腸に関して』と思ったぜ。

おお違うよ、マークは言った、おまえはクラッツの『ほこり』のことを考えているぜ。

おれがか？

警官が出入口を通り過ぎた。

お元気で。

向こうに行こう、マークは言った。

いずれにしても、と二人が通りの中に歩いていった時ピートは言った、愛について尋ねるのに、おまえが打って付けのやつなのは一目瞭然だな。

そうかい？ なぜ？

大事な点はこうだ、とピートは言った。おれは婦人雑誌用に幾つかの恋愛物語の着想を二、三持ってるってこと。

何だって？

そうなんだ。しかし、準備不足で始めることになる、なぜならこのテーマについてはほとんど知らないからな。しかし、もしおまえがおれに二、三何か新しいヒントを与えてくれたなら、このことを十分に把握するのに時間はかからない。

おれのその何とかいうものを引き抜こうとしているんだな。

誓って違うぜ。おれは非常にまじめだよ。それををやってみることがおれのためになるんだ。間違いないさ。それで、さあどうなんだ？

馬鹿言え。おまえは長年恋愛遊戯に膝までたっぷり浸かっているじゃないか？

その通りだよ、マークは言った。そのおかげで世の中は仲良くやっている。

恋をしているやつってのはどう感じる？ どんな感じだ？

おいおい、なぜ自分で見つけようとしなないんだよ？

どうやってやればいいんだ？

彼らは鉄橋の下を歩いた。

いいよ、マークは言った。おまえがそれを持ち出したんだぞ。おまえとバージニアの関係はどうなんだ？

おれたちには共通のものが多くあるんだ。

しかし、おまえは彼女を愛していると言わないだろう？

その質問はまさに妥当であるかもしれない、ピートはいった。しかし答えられないぜ。

血はでるのか？

どういう意味だ？

流れるのか？

血がが？ ええっと、そうだ。近頃はあまり楽しんでいないな。

そうなのか？

人の群れがハックニー・エンパイアー劇場からどっと出てきた。彼らは道路を横切った。

そうさ。これがおれの見方だよ。解決しなければならない不明の要因だったし、そして解決したんだ一何年も前に一そして、今じゃあんまり役にたってないが。

そうなのか、えっ？

そうだ。

それじゃ、マークは言った。おまえはもう一度続けるためなら少し頑張らなければならぬ。

いや、それが答えとは思わないね。

信号を横切り、ケンブリッジ・ヒースの方に動いていったとき、彼らは通りで石鹸の臭いを嗅いだ、さわやかに強烈に。

どこにあるんだろう？ マークは鼻を嗅いだ。工場はどこだ？ どこにある？

向こうのどこかだぜ、とピートは指を指した。

彼らは通りの向こうを見た、そしてアーチ道のすすけた壁の下に、煙突、荒地、幾つかの暗い倉庫が見えた。

無論、それは全くないのかもしれないな。多分神が風呂の水の栓を抜いているのかも。

確かにあるぜ、ピートが言った。一日中あの臭いを出している。おれの寝室の窓の中に直接入ってくるんだ。うってつけのもの、だ。笑って我慢するが。

非常に快適だな。

ケンブリッジ・ヒース駅で二人はカフェーに入っていった、そして紅茶を二つもらって座った。

なあ、ピートが言った。おれは昨晚古いボートの夢の一つを見たんだ。

そうなのか？

そうだよ、ピートが言った。おれはヴァージニアとこのボートに乗ってたんだ、いい？ モーターボートだ。川を下っていった。おれたちは曲がり角で曲がった、するとそこ、二人の前約百ヤード下ったところに、今まで人が見たことがないような全く静かな水の画があったんだ。そこでおれはギニーに言った、そこに入っても大丈夫だろうよと。おれはレバーを押した、そしてポツ、ポツと音を立てて進んでいった。それから、突然エンジンが止まってしまった。燃料が切れたんだ。おれは周りを振り返ってみた。うららかな日だった、そして岸の方には警察署が立っていた。そこでおれは言った、そこへ少しだけ入っていこう。おれたちはあてもなく小さな奥まった所の中に、何とか流れて行こうとした。それからヴァージニアの方を向いて、おれは言った、ちょっと待って、行く前に死体たちを見た方がいい。おれ

たちは小さな隆起した岩の所まで行った。すると、そこには、はがねでできた約1フィートの二人のこびとが横たわっていた、会社のメモ用紙に包まれて。死んでいた。おれたちはそれらを素早く見てそれらをもとに戻した。それから油の缶を取りに言ったんだ、ええ？ おれは、階段を降りていって船室のドアを開けた。角に何か粗麻布にもたれて、同じ大きさで、はがねでできた二人の黒人のこびとが横たわっていたんだ、おれを見ると、じっと見返した、生きていたよ。おれは二、三分やつらをじっと見てそれから言ってやった、おまえたちはおれを驚かせたと思うなよ。そこにいるのはわかっていた。おれは、初めからおまえたちのことはすっかり理解しているんだ。

驚いたぜ、マークは言った。

ピートは、にやっと笑い、マッチ棒で歯をほじくった。

3

わたしは今晚は踊りたいわ。ごく自然よ。

バージニアはソファーにうずくまっていた。部屋は静かだった。一筋の日差しがカーペットに射していた。何一つ音はしなかった。彼女は立ち上がった。部屋の状態が変わった。陽光が揺れ動いた。部屋は安定している。陽光の形が新しくできた。しかし、と彼女は思った、わたしが真っ直ぐ立ち上がる、すると均衡が崩れる。わたしが妨害したのよ。普通では容易に動じない力に暴力を加えたことになる。わたしは転換させたの。

彼女は微笑んだ。それは、明らかに、意表を突く思いつきだった、ピートはそれを笑い、そして、それについてきっともっと詳しく話すだろう。あのひとは何を言うだろうか？ どのように始めるだろうか？ 部屋と日光は全くあるがまま、そしてそれだけだ、と言うわ。多くの部屋とたった一つの太陽だけがあるよ。部屋は構想と建築で不完全かもしれない、そしてその見方から批判されうるだろう。屋根の漏れは欠陥だ。適切な部屋というのは建築者の力量そのものの証拠だ。それは家が引き倒されるまで静止したままだ。それから事実上部屋であることを止める。部屋がある間のその中の変化は、ただ壁、床あるいは天井にだけに捜しだされる。湿気、反り、乾燥腐敗。家具、装飾、電気、水道などの設備は単に二次的なもので、部屋への賦課物に過ぎない。偏見や欲望の活動を部屋のせいにするのは、単に病んだ、あるいは幻惑された精神の投射、感情的耽溺の兆候に過ぎないよ。太陽を批判するのは不条理だ。太陽は輝き、そして地球はその周りを回っている。それを批判したり反感を明らかにすることは、賛美するのと同様に不適切だ。それはどちらにせよ、何らの傾向をもっていない。またどうであれ、太陽を敵あるいは味方、つまり利害関係をもった勢力としてきみ自身の行動に関連があると考えるのは生産的でない。それはきみに関与した勢力でない。太陽や部屋に何らかの他の概念や特質を帰したり、課したりするのは、もっとも粗雑な知的虚偽だ。きみは、太陽を楽しむこともできるし、避けることもできる。部屋が好きになってもいいし嫌いになっ

もいい。用心して行動した方がいいよ、ヴァージニア。

彼女は大声で笑った。きみは用心して行動した方がいいよ、ヴァージニア、か。彼女は通りの角の方を見た、そこでピートは曲がるだろう。しかし彼女は正しかったらどうか？ 彼の話しぶり、事実の申し立ての述べ方についての彼女の試みは正確だったか？

言うのは難しかった。彼女は彼を二年前から知っているが、ある程度の不信なくしては、まだ一日一日と彼の話しぶりを思い出すことができない。彼がそのように語ったのは本当だったか？ 彼女はそうだったと結論付けざるを得なかったが。それから突然、彼女の頭に、多分自分の不信は全然不信ではなくて、単に自分の懸念を覆い隠すものに過ぎないという考えが思い浮かんだ。

もしそれがそうだったら、何を彼女は恐れていたのか？ 最初に彼女を彼に引きつけたのは、あの正にそのパワーと彼の言葉の中にある説得力だった。二人はそれより一週間前に図書館で会っていた、そして二晩続けて散歩した。その日、彼は始めて電話で彼女に話した。ぼくの父が亡くなった。会ってお茶をつき合って欲しいと。二人はハックニー・ロードのカフェで会った。その午後はうっとうしく、威圧的だった。彼らが座ったとき、ピートが話し始めた。彼女は彼をじっと見つめて聞いた。警察は父が自殺したと思っている、と彼は言った。彼自身はそうは思わなかった。父は酔っ払ってガスをつけっぱなしにした可能性が高かったのだ。彼が母の叫び声を聞いたのは、彼が配水管の具合が悪くて、台所の流し台を直していた時だった。彼女は部屋にいて、父の体を見下ろして立っていた。父はカーペットにぱったり倒れていて、部屋にガスが充満していた。母は警察を呼びに行った。彼は父の所にとどまった。彼女は今まで死者と一緒にいたことがあったらどうか？ 彼はベッドの脚のように死んでいた、そしてその上、無、全く何物でもなかった。彼は古いスペイン産白ワインのように気が抜けたのを感じた。すべてこの感情ってやつ、それは何だ？ 石炭投入口を吹き落ちる大量のあぶく。彼は古いまき束のように干からびていた。スパナーはまだ彼の手の中にあった。彼は戻って行って、容易に流しの修理を終えることができた。二と二を足してみろ、そうすればそれが何になる？ ゼロだ。警察が来る前に、彼は死体を見下ろし二十分も佇んでいた。彼の父は外皮の堅い年老いたアリのように死んでいた、彼に関してはすべてのことに、洋裁師にとって何の関心もなかった。

ピートは腕の下に茶色の紙包みを持って入ってきて、そしてそれをテーブルの上に置いた。彼はがさがさと包みを開け、白い夏服を取り出し、それを彼女に手渡した。彼女はセーターとスカートを脱いで、それに着替えた。

そのままじっとして。

彼女は立ったまま振り返った。

窓の所まで行って。

彼女は窓まで歩き、スカートを持って回転し、鏡に写った自分の姿をじっと見た。

気に入った？ そのままにされていて。日光がきみの顔の側面に差し、首に当たっている。魅力的に見えるよ。

彼は腰を下ろし、タバコに火をつけた。

これ、美しいわ、と彼女は言って、椅子の肘掛けに腰を掛けた。有り難うね。

それ、きみに似合ってるよ。

これは、特別の時に取っておくわ。

いや、ピートが言った。夏こそその服にぴったりだよ。おれはきみが外を歩くのを見たいよ。

太陽の下を。

そうだよ。そうするのがふさわしい。

どこへ行っていたの？

エンバークメントへ行った。船が通るのを見るため。ちょっと休息で。あの事務所では猿たちのお茶会のようなんだ。

女の子達？

そう。

何をするの？

見ないようにしてる。おそらく方言を使って、互いにじゃれ合っているんだろう。

全く関わらないようにしてるよ。

彼女たちそうさせてくれる？

おれに近づいてこないから。あいつら、おれが連中をくず扱っているのを知っているから。

今日は暑くなかった？

暑かったかって？ ミイラになったぜ。海風は心地よかったけれど。ごみが浮いているのを見るのは素晴らしかった。

ヴァージニアは鏡まで歩いて自分を見た。彼女は振り返った。

ピート？

うん？

太陽をどう思う？

何をどうだって？

あなたはどのように太陽を眺める？

どういう意味だ、おれがどのようにそれを眺めるとは？

ううん、大したことではないの。

大したことでない？ 何が？

彼は窓までぶらついた。

沈んでいく。

わたしはここにずっと座っていたの、と彼女は言った。

彼はタバコの煙を吐いて輪を作った、そしてそれが宙に浮いて揺れ動くのを見つめた。

おれが太陽をどう思うかって、ええ？ それは面白い質問だ。

あなたはドレスをつくるの楽しかった？

あのドレス？確かに。

申し分ない出来よ。

うん。おれは一縫い毎に駒を動かしたよ。予定通り行われた。

彼女は窓辺の彼の所に来た。

おれにきみのペチコートをつくらせてくれる？彼は尋ねた。

ええ、お願い。

いいよ、つくるよ。

二人は太陽が煙突の間に沈んでいくのをじっと見た。彼は彼女の側頭部を彼の方に傾けさせ、腕を彼女の腰に回した。

今日はきみが好きだ、彼は言った。

ドレスのせい？

いや。

彼は彼女を自分の方に向けて、キスをした。

お茶を飲みましょう。

うん。

彼は彼女が食器棚の方へ動いていくのを見た。

そうだ、彼は言った、その服を着るときみはよく映えるよ。

それは傑作よ、と彼女は言った。

しかし、ねえ、いいかい？彼は腰を下ろして言った、幾つかの点で、きみは女というより、おれにはもっと男の子のようだよ。

どういう意味なの？

いや、大丈夫、女性だが。しかし、精神的エネルギーの一定した保ち方が好きだな。おれ自身、そこから多くを学べるよ。しかし、きみが何であれ、おれにはいい伴侶だ。本当に気のあった友だちだ。

ほんとう？

そうだよ、いいかい、例えば、マークはそのことを決して理解できなかった。あいつにとっては、女は単に一つのことにはすぎない、それ以上でない。心の含みといったものがおれたちの間にはある、そういったことは彼の範囲外だ。いつもと言うわけではないが、多分、しかし多く。

彼女はテーブルにカップを持ってきてミルクを注いだ。

マークは自分の女すべてに自分を敬称で呼んで、一日に三度挨拶をして欲しい。そして彼はそれに対し、いちいち帽子を揚げたくない。更におれを苛立たせるんだが、間違いなくやつは、ほとんど避妊具を用いないで乗っかって、そのことにへっちゃらだ。

お茶がはいったわよ。

二人はテーブルに座り、そして彼女は一塊のパンにナイフを入れた。

人は、明かりが消えたとき、その人だけによって開けられる防水室に女性を入れ込むことはできないよ、とピートは言った。女性は他の領域では可能性があるんだから。

しかし、あなたは彼が好きなんでしょう？

彼が好き？ もちろん嫌いじゃない。

彼はトマトをスライスし、皿に塩入れを傾けて入れた。

あのひとは、いつもよく耳を傾ける人よ、ヴァージニアは言った。

やつは頑固な保守主義者だぜ。それが彼の実体だよ。やつは先日、おれの問題への答えとして、もっと頻繁にきみとベッドへ行くべきだと、おれに説得しようとした。

マークが？

そうだ。

しかしどうしてあのひとは知っているの？ つまり、どうして何か知っているの？

私たちのことについて？

わからない。おそらくおれが言ったのかもしれない。

私たちがあまり愛し合っていないと、あなたが彼に言ったということ？

うん。

おお。

あれ、困る？

いいえ。

別に恥ずべきことじゃないだろ。

ええ、しかしどうして二人が相談して手紙を書いて、彼に送らないの？

そんなことする必要はないさ、ピートが言った。

彼はお茶を注いだ。

あのひとの気を楽しませるためよ。

おれは思わない、ピートが言った、やつがおれたちの問題でとても動揺するとは。

するかもよ、と彼女は言った。あの人は非常に興味があるかもしれないわ。もちろん、私はいつでも意地悪で書いた手紙を送れるわ、いらぬお世話よと言って。

へい、ピートは言った、ちょっと待てよ。

私たちは実際あの人からテクニクの心得を必要とするかしら？

まあ、ちょっと待って。まず第一に、きみはおれの友人の一人について話している。第二に、やつが言ったことを完全に文脈を離れて聞いている、そして第三に、率直に言おう、そこには少しの真実があるかもしれないぜ。

ええ？

そうだ、ピートは言った、しかしきみはその少しの真実を目下の問題と比較考察しなければいけないよ。そして 要するに おれはそれを総合的な基礎概念としては不十分だと見ている この個別の場合には。そう思わないかい？ 結局、セックスはセックスだ、がそれは他と無関係には起こらない。その状況個々のものだ。

それがセックスね。

それは見当違いなんだ、とピートは言った。

4

テーブルがある。あれはテーブルだ。椅子がある。テーブルがある。あれは果物の鉢。テーブルクロスがある。カーテンがある。風は全くない。石炭バケツがある。この部屋には女は誰もいない。これは部屋だ。壁紙がある、壁に。六つの壁がある。八つの壁。八角形。この部屋は八角形、女はいず一匹のネコだけ。ネコがカーペットにいる。暖炉の上に鏡がある。ぼくの靴がある、ぼくの足の上に。風は全くない。これは旅、そして待ち伏せ。これは寒気を中心、旅の休止、何の待ち伏せではない。これはおれが隠れる深い草。これは夜と朝の中心にある藪。短剣のような百ワットの電球がある。朝でも夜でもない。

この部屋は動く。この部屋は動いている。それは動いた。それは到達した 突然の停止。待ち伏せなんか無い。敵は誰もいない。わなはない。全ては明らかで豊富だ、閉鎖されていないし、閉じようとしていないし、動かされていないし、動いていないし、ここそしていないし、狡猾さを持ち合わせていない。時は庭があるところでは暗くなるだろう。ここにぼくの持ち合わせ品がある。これがぼくの取り付け品。多分朝になるだろう。もし朝が来ても、それはぼくの固定備品を又贅沢品を破壊しないだろう。ぼくの城壁の上には道がある、その最終地で出入口がない。さまざまなものの集合所、すべて装置の中。もし夜に暗くあるいは明るくても、干渉するものは何もない。ぼくは自分の小部屋がある。ぼくには個室がある。全ては秩序付けられ、本来の場所にあり、何らの過ちもなされていない。ぼくは動けない。逃げ出すことは出来ない。夜でもないし、朝でもない。二人の見知らぬ同士の間には、何ら待ち伏せもない、あるのはこの状態だけ、ぼくの取り付け品、ぼくの装置がある、ぼくが家にいるとき、ぼくは一人のとき、整えることを必要とせず、ぼくには盟友がおり、ぼくには物があり、ぼくにはネコがおり、ぼくにはカーペットがあり、ぼくには土地がある、これは王国であり、裏切りはなく、信頼はなく、旅はなく、誰もぼくの脇腹に弾丸を撃ち込むことはない。やつらは弾丸を撃ち込む、ぼくの脇腹に。

ベルが部屋の中で裂けた。レンは立ち上がった。彼はテーブルの本を脇に押し、テーブルクロスを持ち上げ、ネコを肘で押しやり、そして静かに立った。彼は肘掛け椅子のふくらみの中に深く入り込むのを感じ、クッションを持ち上げて窓の下枠を叩き、カーテンを引いてしめ、じっと佇んだ。ベルが鳴った。かれは暖炉を点検し、炉床を見るのに膝をつき、テーブルの下を這って床に敷物が無いのに気づいた。彼は立ち上がってじっとした。ベルが鳴った。彼は鏡台の方に動き、椀一杯の手紙を空っぽにし、皿からカップを持ち上げて、そして身震いしながら足元を見下ろした。彼の眼は影を捕まえて、顎が更に引かれた。彼のジャケットの上ポケットにメガネがあった。彼はそれをかけて正面ドアまで階段を上がって行き、ドアを開けた。

何をやってたんだ？とマークは尋ねた。出陣の踊りか？上下に動いているおまえの影が見えていたぜ。

どこから僕の影が見えたんだ？

郵便受けを通してだ。

通りでは雨が暗闇の中、滑るように降っていた。

何時なのかな？レンは尋ねた。

ええっと、マークは言った、それに近づいているだろうよ。

中に入った方がいいよ。

部屋でマークはレインコートを脱いで、そしてクッションを直して、どっしりと肘掛け椅子に腰を下ろした。

これは何？スーツ？カーネーションはどこに？

これをどう思う？マークは尋ねた。

レンは襟の折り返しを指で触って、ジャケットを開き、中を見た。

悪い服ではないよ、彼は言った。

尻のところにジッパーがあるぜ。

尻にジッパー？何のためだい？

留め金の代わりだよ。上品だ。

上品？むろん品がいいよ。

折り返しがない。

本当に。何故折り返しにしなかったんだ？

折り返しがない方がハイカラだよ。

勿論、折り返しがないほうがあかぬけしているね。

おれはダブルにしたくなかった。

ダブルに？勿論きみならダブルにしたはずはないな。

生地はどう思う？

生地？何という生地だ。何という生地だ。何という生地。何という生地。何という生地だ。

生地は気に入った？

何という生地だ！

スタイルはどう思う？

型はどう思うかだって？型？型？何という型だ！何というスタイル！そのような型は見たことがない！

彼は腰を下ろしてうめいた。

おれがどこに行っていたかわかるか？マークが尋ねた。

どこだ？

アールズ・コート。

あああー！そこで何をしていたの？

それは、的外れだな。

アールズ・コートはどこが問題だ？

そこは死体のない死体仮置き場だよ。

欠伸をしながら、レンはメガネを外して、指関節を眼に押しつけた。マークはタバコに火をつけて、部屋を歩き回り、腕を差し伸ばしてじっと見つめた。

きみは何をやっているんだ、雄牛を献納しているのか？

そのとおり。

彼は灰皿を見つけて座った。

どうやって戻ってきたんだ、深夜バスでか？

もちろん。

どのバスだい？

フリート・ストリート行 A 二九七。そこから A 二九六。

レンは立ち上がって、ネコを裏ドアの外に出してやった。彼は外をちらと見て、すぐにドアを閉めた。

ぼくはノッチングヒル・ゲートからここまで一時間かっきりできみを連れて来れるよ、と彼は言った。

おれをか？

簡単だよ。完全だ。夜のどの時間でも。例えば、一時五十二分にノッチングヒル・ゲート、いや一時五十二分にシェパーズ・ブッシュにいるとする。一時五十六分あるいは一時五十七分にノッチングヒル・ゲートに着く。二時五分か六分にマーブル・アーチに着く二百八十九番のバスに乗る。どこにいるのかわからないうちに着くんだが、二時六分頃そこで、エッジウェア・ロードから来て、二時七分にマーブル・アーチに着く二百九十一番か二百九十四番に乗る、何て言ったっけ？ その通り。それでよし。きみはオールドウィッチ劇場行きのそれに乗ると、二時十五分あるいは十四分頃そこに着くよ、そして二時十六分にウォータールーからの二百九十六番に乗ることができ、ハックニーまでずっと連れて行ってくれるよ。もし三時以降なら割引切符で何もかも間に合うよ。

大いに感謝するぜ、マークが言った。おまえはノッチングヒル・ゲートで何の用なんだい？

ノッチングヒル・ゲート？ それはきみのためだよ。ノッチングヒル・ゲートの近くのどこにも行かないよ。

おれはアールズ・コートにいた、と言ったところだよ。

ああ！とレンは言った。その場所の名は言わないでくれ。

マークは股間を搔いて脚を伸ばした。

おまえは何をしていたんだ、と彼は尋ねた、おれがドアをノックしたとき。

していた？ 考えていたんだよ。

何について？

無。無についてだよ。この部屋。無。時間、考え、思索の浪費。

この部屋がどうしたんだ？

この部屋がどうかしたかだって？ それは存在しないんだ！ きみがわかっていないことは、いいかい、やつらは身代金のためぼくを襲っている。もし誰かがすぐに支払ってくれないなら、ぼくは死ぬ運命にある者だ。

やつらは多額を求めているのか？

かれらは通貨を求めているはいない。やつらは金は欲しくない、それに触りたくない。誰も与える用意がない何かを求めている。そしてぼくは自身、それを持っていないので与えられないのさ。ああ、それは重要ではないんだ。そんなことはどうだっていいじゃないか？

すべてのものには時と場所がある。こういったことを正視すべきなんだ。

おまえはこれ以上の本当の言葉を決して言わなかったぜ

何？ それどういう意味？

すべてのものには時と場所がある。これらのことは直視されるべきなんだ。

きみはこれ以上の真実の言葉を言うことは決してなかったね。

マークは短く咳をし、火床に唾を吐いた。

バターが値上がりしているぜ、とマークが口を拭きながら言った。

そのことを信じるのはやぶさかではないが、レンが言った、しかしそれではぼくの答えになっていないよ。

質問は何だった？

ここできみは何をしようとしてる？ 用事は何だ？

おれは、おまえがハチミツを塗ったパン一枚をくれるかもしれないと思ったよ。

レンは窓まで動いて行って、カーテンをぴしっと伸ばした。

きみが怖がっているのはわかるよ、ね。

そうかい？ マークは言った。何を？

きみは、ぼくが赤熱の燃えている石炭をきみの口の中に今にも入れそうだと怖がっている。そうだ。しかし、その時が来たらいい、ぼくがきっとするのはぼく自身の口の中に、その石炭を入れることなんだよ。

それは何故だ？

何故？ それは明らかなはずだ。ピートならきみに教えてくれるだろう。彼は常識離れたやつではないだろうから。

そう思うかい？

彼なら因習にとらわれないことはないだろう、レンは言った、テーブルにすわったまま。しかし奴についてちょっとおこう。きみがここにいるので、いい、無においてはどんな状態かぼくはわかっている。ぼくは無を知っている。不毛の無感覚な空。しかしピートにとっては、無でさえ建設的な何かなんだ。ピートの無は食い荒らす、それは貪欲、それは悪意ある成長だ。しかし、わかるかい、彼は抵抗す

る、死ぬまでそれと取っ組み合いをする。やつはファイターだよ。ぼくの無はわざわざそのように行動しない。それはぼくが尻込みする間、そのかぎ爪の足を舐めている。それは真の無だ、麻痺だ。全くの衝突も戦いもない。ぼくがそれなんだ。ぼくは自分自身の無だ。ぼくが大いに喜ばなければならない唯一のものは、それなんだ。落花生、マークが言った。

何故そんなことを言う？

ネコの小便。

いいよ、わかったよ。もしきみがそう信じているなら、別の質問をしよう。

尋ねたまえ。

きみがジーザス・クライストに反対することは何だった？

それは速球のヨーカーだ。

きみはそれが出来るのか？

彼はどんな会社で働いている？

彼は自由契約だ。

おお、そう、マークは言った、やつは犬に本をぶつけるんだらう、違うか？

まちがいなく本をぶつけるよ。

そういうやつだよ、マークは言った。えーっと、やつは最近おまえに何かいいことしてくれたか？

彼はぼくに二、三信頼できるヒントをくれたよ、本当なんだよ、とレンが言って、肩をすくめた。ところで、全ての人には盲点があると思うよ。

彼は指を堅く握ったり緩めたりしながら、部屋を大まかに歩き始めた。

実際のところ、とマークが言った、おれは、おまえんとこの料金が上がっているという噂を聞いたぜ。

彼はその場で立ち止まり、振り返った。

上がっているだって？ 誰がきみにそう言ったんだ？

生活費に負担をかけないことを望むぜ。

レンは暖炉のところでマークの方に顔を向けて、腰を下ろし微笑んだ。

ぼくはこれを待っていたんだよ、彼は言った。

同一料金区間という考えを出してくれたらいい。余分の1ペニーを節約できるなら歩くぜ。

ちょっと聞いてくれ。料金が上がっているのは認めるよ、しかし、もしきみが料金を払えないと感じるなら、ぼくはいつもきみをどうにかして運転手の隣や荷物入れの中においてやるよ。しかし、全く率直に言えば、むしろきみに正しい料金を大いに提示したいよ。何が希望だい？ しかしどうやって値上がりのことは知ったんだ？

ピートが教えてくれたぜ。

思っていたとおりだな。

何故？ やつはそれで金を得たのか？

見方によればそうだと思う、しかし、それは的を外れている。ぼくはきみから適正な料金、あるいはそのような何かを教えてもらうのは想像できない。しかしきみは、収支決算の上昇、下降に左右されていることを理解しなければいけない。もし景気が下がったり上がったりすれば、何ができる？ いいかい、マーク、それは全くの真実だよ。調査官は今大きな本の後ろに隠れている。ぼくはそれを否定しないよ。向こうにいる、無線によって。

マークは椅子の中で振り返り、肩越しに見た。

要注意人物名簿帳か？

そうだよ。

厚い黒書？

そうだ。

よく知られているようだな。

ほー。

たくさんのページ、あの本には。

その通り。それでやつはそこに隠れているんだ、しかしぼくはやつに会うつもりだ、本当に。少なくともちらりと見るつもりだ。

それは具合が悪いのか？ マークは言った。

何も。それに悪いことは何もないよ。きみにぼくの調査の結果を教えよう。

よし、わかった。

しかし、マーク、お願いがあるんだけど、唾を吐かないでくれ。きみは唾を吐いてはいけない。きみには権利があることは知っている、が、ぼくもそうだ。きみはたとえ他に何も持っていないとしても、マナーは保つ必要があるよ。お願いしたいことは、抑制力を使って欲しいということだけだ。

ちょっと待てよ。だれが料金を上げているんだった、おれかおまえか？

説明させてくれ、レンは言った。いいかい、ぼくの困った点の一つは、宮殿と月の影を實在の物と間違いがちなことだ。ぼくの祖先達は、實在物はどれか教えてくれていて、ぼくは先輩達を尊敬している。しかしぼくは自身で確かに見つけださなければいけない。ぼくは多くの影を見透かして、実物を見つけようとしなければいけない。何をぼくは失うことがあるのか？ もちろん、きみにはきみの権利はあるが、ぼくにはぼくの権利を持たせてくれよ、そうすればきみは権利を持てるじゃないか！

「判定はどうか」？

アウトでない。

ピートについてはどうなんだ？ やつにも彼の権利はあるのか？

ピートは彼の権利を持てるだろうよ、レンは言った、ぼくたちが死んでそして埋葬されたら。きみがどうあろうと、ピートは彼の権利を持つよ。

マークはタバコに火をつけ、マッチを吹き消した。

いいか、レン、と彼は言った、おまえがやらなければいけないことは、はり紙を掲げることだけだ。「唾吐き禁止」。それには誰も異議を唱えられないぜ。料金は十分高すぎる。それに加えて おれには罰金を払う余裕がない。

そうだ、それは良い考えだな。そうするよ。しかし、もしきみが偶然唾を吐いて、罰金を払うことができないとしても、ぼくはその結果に責任はとらないよ。

その問題は起こらないぜ。

しかしわかるだろう。ぼくは自身のトランクに乗る必要がないように自分の料金を払って、前の座席に座らなければならないのが？ ぼくはトランクからだと見えないうえ、そしてぼくには運転を見張る必要がある。ほとんど他の誰もがその料金の余裕がないゆえに、ぼくにはたくさんの座る場所があるんだ。その場合にはぼくは、ぼく自身のルートからはずれないで交通渋滞を避けることができるよ。ぼくはそうしなければならない。

5

ピートは彼女の体越しに部屋の丸く曲がった影の方を見た、それから彼女の髪をたくり寄せ、クッションの上で後ろに撫でつけた。窓枠のあたりに月がかかっていた。彼女は自分の方に彼をたくり寄せた。彼は彼女の胸に頭を乗せた。二人の頭上で、開いた窓を通して、微風が軽く動いた。彼女は彼の頭越しに壁の方を見た。彼女は二人の接合地点が判然とわからなかった。二人は離れるようにも彼女に近づくようにも思われた。彼女はしわが寄った天井をじっと見つめた。垂れた影の薄暗い縁が最初にははっきりしていたが、今や彼女の目にはぼんやりして、形から幻影へ、天井のふくらみへと変化した。壁の上には、窓の光から向けられた横縞のある長方形の影があった。暗闇は、体の上で鋭くなり、重くなり、そして彼女が目を大きく開けそれを凝視した時、散らばり、引いていった。

わたしは、地表から暗闇を追放したわ、と彼女は言った。

ピートは椅子の脚に、伸ばした両腕を回して、両手を握った。

どのようにそれをやったんだ？

いや、暗いわ、彼女は言った。あなたが動いたからもっとそうよ。

それは暑さだよ。もしそんなに暑くなかったなら、それほど暗くはないだろう。

しかし夏には、ヴァージニアは言った、昼は夜にならない。昼は昼。冬には、夜は昼の中にある。夏には

おれはきっと、ピートは言った、きみに同意するわけではないよ

彼はあくびをして、体を伸ばし、足で炉格子を押した。

しかし、今は暗いわ。私たちがこんなに白いので一層暗いわ、と彼女が言った。

そうだ。

彼は彼女を自分に引き寄せキスをし、彼女をクッションの方に向け、そして彼女の顔

をじっと見下ろした。

きみは目を閉じないね。

ええ、彼女は言った。

なぜ閉じない？

あなたを見たいから。

なぜ？

あなたを愛しているからよ。

うん、ピートは言った、おれもそうだよ。

月は窓の真ん中に達した。椅子の横棒の間から、それは二人をこうこうと照らした。

ねえ。おれがきみを愛していると信じないのかい？

そうなの？

信じる？

いいえ。

きみは間違っている、ピートは言った。おれはきみを愛しているよ。

彼は椅子の脇に手を伸ばして、ジャケットからタバコを二本取り出し、彼女の口に一本入れた

幾つかの点でおれは積極性に欠けるよ。

彼は煙をためて、息で吹き散らした。

しかしわたしは前より無知でなくなっているわ。

無知？

あなたを愛することを学んでいるように思うわ。

どのように？

多分あなたが私に教えているのよ。他の誰がするかしら？

おれが？

ほかに誰が？

彼女は起き上がって、彼に顔を向けた。

先日あなたは私に、私はあなたには男の子のようだ、と言ったわね。

言ったよ、幾つかの点で。

しかしー

おれは考えていたんだ。

何を？

少しよく考えていたんだ。

彼は彼女の尻にあるクッションに頭を落とし、炉床に彼の足を伸ばした、そして彼女は、彼と共にぐるっと旋回し見下ろした。体を曲げて、彼女は彼にキスをし、それから離れて移動し、真っ直ぐに座った。彼は彼女を引き戻し、彼女の肩に口を押しつけた。彼女の髪の毛は彼女の顔の前で揺れ動いた。彼は彼女の胸にキスをした。彼女は窓をじっと見つめた。明かりはガラスでおおわれた。彼女は彼の尻に目をやり、そして体に目を

落とした。彼の腕は彼女を抱きしめ、二人はキスをし、クッションから転がり落ちた。彼のももは彼女自身のその間でしっかりとつかまれていた。二人はじっとしていた。テーブルの裏側が黒く頭上にあった、彼女の手は彼の腰に置かれていた。彼は抱擁から身を離し、起き上がった。

そう、きみは非常に美しい。

彼らはクッションに戻って、座って互いを見つめ合った。

しかしぼくは何を言っていたんだ？ 彼は微笑んだ。

あなたは考えごとをしていたわ。

そうだった。

あなたはズーっと考えごとをしていた。

ピートは炉床から彼女のタバコを拾い上げ、それを彼女に渡した。

時々起こることは、と彼は言った、きみは実際、きみの思っている以上に先に行っていることだ。きみは自身の時代に遅れているが、それを知らない。全てこのことが、今わかったんだが、おれには暫く前から起こっていたんだ、そしておれはそのことに十分気づけなかった。あるいは多分それを信じるのに気が進まなかったのだ。おれはしばらく前からきみを愛するようになっていたんだね。

ヴァージニアは黙っていた。彼は仰向けになって部屋の暗い隅をじっと見た。

本当？

本当だ、しかおれは望みたい。きみにそれを確かめるのを手伝って欲しいんだよ。いいわ。

おれたちはそうできる。そう確信するぜ。

音一つ聞こえないわ、とヴァージニアは言った。

ちょっと。

うん？

おれは今晚はここに留まるつもりだぜ。

そう？

うん。

この前いつあなたがそうしたか覚えてないわ。

さあ、彼は言った、これでよしと。

ここに私がいて、あなたがいる。あなた、私と踊りたい？

どうということだい？ 今？

ええ。

今でなくても、えっ？ ピートが言った。

いいわよ。

少しワインを飲もう。

彼は立ち上がって、テーブルまで歩き、赤ワインを二杯注いだ。

きみは非常にきゃしゃで、非常に引き締まっている。

乾杯。

月がきみにつきまどっているぜ。

いいえ、私はその方向にいつもいるのよ。

それはきみの特権だ。

ええ、もちろんよ。

彼は窓辺に立って、外を見た。

風は全くない。

レンは以前私にそう言ったわ、と彼女は言った。

何て？

彼はただ私を見て、言ったわ、風が全くないって。

ああ、ピートは言った。レン。おれは明日の晩やつに会うことになっているんだ。

彼は頭を傾け、そして空を見上げた。

全く静まりかえっているな、いずれにせよ。

非常に重大そうに聞こえるわね、と彼女は言った。

何が？

明日の夜レンに合うこと。

いいや、なぜ？

彼は彼女のそばに座った。

おれたちは何だろう、おれときみ？ おれたちが違うのは、二つから成る恋愛機械の部品でないことだ。

ええ、確かにそうでないわ。

ほんとうに。きみは、おれにははるかそれ以上の何かを表している。例えば、きみは挑発的な装身具やそのような類いのもので心を乱す必要はない。それらは見当違いだ。きみの挑発は別の類い、それはもっと純粋なもの。

そう？

そうだよ、それはきみ自身や他の全ての人を無視して存在する。きみは、きみ以外の全ての人のように性的刺激を求める必要はない。それがきみの使命ではない。きみの天職は神々の弟子になることだ。おれについてくるかい？

ピートはワインをグラスに注いで瓶を空にした。ヴァージニアはベッドに滑り込んだ。おれがマークと以前よく、あちこちほっつき回っていたとき ガキの1人だった頃、おれの悩みの種は何だったか、話したことがあったか？とピートは言った。鎧で体を覆った女たち。それはかなてこに恋をするほどは難しくはないレヴェルだが。おれはかつてガーターがぶつつり切れたのを覚えているよ。おれたちはハックニーの墓地の中の墓石に腰をかけていたんだ。おれは留め金ともう一方のガーターの間で挟まれた。ほとんどペニスが縮むほどだったよ。彼女は看護師だった、あのやつ。十分な資格ありだった。あの女はよくおれの皮膚を抓ったものだ、いかにおれを死体として横たえるかを示そうとしてね。非常に愉快だが、しかし、大体において、

むだな骨折りさ。

あなたとマークはいつもその頃つきあっていたの？

そうだよ。交替勤務。仕事だ。明日は仕事、欠伸しながら彼は言った。会社の地下貯蔵庫には船を沈めるほどの鹿肉がたっぷりあるのを知ってるか？

誰のためなの？

重役やその奥さんたちさ。

彼はベッドに這い上がって行き、そして腕に彼女を抱いた。

わたしにはこれがいいわ、彼女が言った。

おれもさ。

教師がいつも一人で寝るのはよくないぞ。

教会のベルが二時を打った。

あなたの目は非常に明るいわね、彼女は言った。

きみの目がそんなに開いているのは見たことがないぜ

わたしのは夜に大きくなるの。

彼は彼女の眉と目のくぼみ、そして頬をなぞった。

今夜は夢が見えるな。

いいえ、目を閉じて彼女は呟いた、私たちは夢を見ないわ。

見るよ、ピートは言った、月を。

前に上体を曲げながら、二人は窓の外を見た。

ええ。

雲の筋と穴に縁取られて、明るい月のはりついていた。

注1 テキストは、Harold Pinter, *The Dwarfs: A Novel* (London:Faber and Faber, 1990) を使用した。